

舟



Boat

作・演出

山口

和伸

キャスト

語り・影アナ

狸男（タヌオ）

狸美（タヌミ）

ポン子

爺様

婆様

トメさん

猪之介（元締め）

バニー（う詐欺団うさぎ）

ハニー（う詐欺団うさぎ）

パニー（う詐欺団うさぎ）

メニー（う詐欺団シラサギ）

う詐欺団特別ダンスチーム

歌手

※舞台…物語の世界ではあるが、爺様の寂しさを表現するなど、象徴的なセットで構わない。ただ、道具類は具
体性のあるもので、それ自体も「語る力」があるものを
逆に利用。(爺様が磨く安物の壺・湯呑茶碗・汚れた藁座
布団……いろいろ)

紗幕奥は物語の世界の過去であり、最後のシーンでは
タヌオの未来でもある。

上手が隠された詐欺団の世界。

詐欺団は残忍な、しかも欲望の溢れた世界。

下手に爺様の家。

中央は道であり、多くの者が隠れるという行為をする動
の空間。

第一幕

1 (プロローグ)

歌手

(曲が流れ、歌手上手より登場。前舞台上手寄り所定位
置にて一番の歌詞を歌い始める)

哀愁のこもった歌を歌う。

(二番の歌詞を歌い終えた所で緞帳アップ。すると、舞台
紗幕前のみ照明が入り、懸命に舟を磨くタヌオの姿が映
し出される。そこにタヌミが、まるで野原から摘んでき
たような花の束を持って舞台下手より登場し、タヌオの
もとへ近寄って行く。そしてその持ってきた花の束を供

え、そつと手を合わせる。が、タヌオとは言葉を交わす事無く、舞台下手へ足早に去って行く。その去って行くタヌミの姿を寂しげに見送るタヌオ。そしてタヌオも舟を前に手を合わせ、その後舞台上手へと去って行く。(※全てマイムにて表現する)この時、爺様一人、爺様の家にて板付きしている。

歌手

【歌手、二番の歌詞を歌う】

(歌ゆつくりとフェードアウト。歌手上手へ去る。それと入れ替わるように、語り部が舞台下手より登場し、前舞台下手寄り所定位置に立つ)

語り部

皆さんは、「カチカチ山」という話をご存知ですね。

そう、タヌキが人間に悪さをして、ウサギに仕返しをさ

れる話です。

ウサギは、最初は藁集めを手伝おうとしたタヌキの背負子しよいこに火を点けます。火打石の「カチカチ」という音を、「カチカチ鳥だよ。」と嘘をついて火傷を負わせてしまいます。

次に漁師に変装したウサギは、タヌキを漁に誘い、泥の舟に乗せ・・・沈めてしまいます。

敵討ちは成功という偉いウサギの話です・・・が。

え？何となくうさぎに対して角がある物言いですって？

(少し興奮して) そもそも、タヌキが人間に何をした

か・・・それは不明なのですよ。婆様を死なせたとか色々言われていますが、つまらないいたずらで捕まえたのは

人間です。そして理不尽にもタヌキ汁にされそうになったのが発端です。いたずらをしてタヌキ汁にされる。こんな不条理なことがありますか皆さん。タヌキ汁。食べたことありますか皆さん。そんなに美味しいのですか。つい、興奮してしまいました。申し訳ありません。

ウサギは動物の仲間のタヌキの親切に対し、背中に火をつけるという行為をして火傷を負わせます。タヌキはウサギに何か悪さをしたのでしょうか。

しかもウサギは、漁師に化けてタヌキを騙し、泥舟に乗せて沈めてしまいます。溺れることがわかっていながら。

騙したのは・・・ウサギです。

爺様

果たして、善良なウサギ・・・だったのでしょうか。

この話は、過去を振り返る話ではありません。

その息子、そして妹の話です。

生き方を探す話です。

(語り部下手退場。)

2 (のこされた爺様)

(爺様の家が明るくなる)

(爺様は、一心に壺を磨いている。それを壁の隙間より
呆れ返った様な表情で覗き込んでいる婆様とトメ)

流石に明の壺だ。この形といい公台こうだいといい間違いない。

この景色がまたいいじゃないか。何と言ったか、ハニーさんだったか、わしが「いい仕事をしていますなあ」と言う。「お目が高い」などど・ふふふ。これが二十両。安いもんじゃ。

(婆様とトメ、壁の隙間より登場)

何が「安いもんじゃ」だ。あんなもの買わされて。久しぶりに家に帰ってきたら、なんてこと・・・。

ウメさん、言っちゃ悪いが、あんたの爺様、お目が高いどころか、目が曇ってるんじゃないのかい。明の壺なんて聞いて呆れる。ありや、古物市の売れ残りだよ。

そうだよ、トメさん。あんなものに二十両も払うなんて。

トメ

騙されたんだよ、きつと。その「ハニー」とか言う女が騙したんじゃないのかい。

婆様

誰なんだろう、「ハニー」って。何か甘ったるい声を出していたけれど。

トメ

女だね、きつと。それに色っぽい。

婆様

あらやだ、爺様そんなのに言い寄られているのかい。そんないい男には思えないけど…。

爺様

(爺様、派手にくしゃみをする。手で鼻を拭く。)

トメ

…確かに…。どっちかと言うと下品だね。

婆様

トメさん、何もそこまで言わなくたっていいじゃないか。(ちよつとふくれる)

トメ

おやウメさん、妬いてるのかい。

婆様

そ、そんなことは無いよ。ただ、悪い女に引つかからなければいいが・・・とね。

トメ

また、来るんじゃないかい、その「ハニー」とか言う

女。もし来たら、いたずらをしてやろうよ。

婆様

そうだね、トメさん。それが面白そうだ。

トメ

そういえばウメさんどうして十両もあるのさ、あなたの

家。お金有りそうに見えないけど。

婆様

それがねトメさん、聞いておくれよ。

トメ

何だい

婆様

わたしは、タヌキに殺されて死んだことになって

いるじゃないか。酷い事件だつてさ。

トメ

世間ではそう言ってるね。

婆様

それでさ、近郷近在の村や庄屋様まで憐れんでくれてね。気落ちするなど、何と合わせて百両もの大金を爺様にくれたんだよ。

トメ

百両！すごいじゃないか。タヌキは憎いけれど、これから先、ウメさんがいなくても十分に暮らせるじゃないか。

婆様

それが・・・違うんだよ。

トメ

え？

わたしや、タヌキに殺されたんじゃないのさ。

トメ

違うのかい？

婆様

あの日、爺様がタヌキ汁につけてタヌキを捕まえてきたんだけど、可哀そうなんで逃がしてやったんだよ。あの

タヌキはときどき藁を集めたり、魚取りをしたりいろいろ手伝ってくれてね。鍋を下ろそうとしたら…。

トメ
下そうとしたら？

婆様
いきなり大きな猪が家に飛び込んできてさ、暴れてさ、煮立った鍋の湯を被ってしまったのさ。大やけどした。

トメ
熱かった。それを、あの慌て者の爺様がタヌキの仕業と勘違いしたんだよ。

婆様
じゃあ悪いのは、猪じゃないか。

トメ
わたしや死んでしまったからね。爺様には教えられなかった。

婆様
タヌキも死んじゃったよね。

トメ
そう、ウサギに騙されてね。

爺様

おおい、婆さんや、婆さん、茶をくれ！茶を！・・・。

(婆様とトメが振り向く)

爺様

そうか婆様はいないんだ・・・。(寂しさと、自分で少しで

も見切りを付けようとする演技)

この壺がある。

婆様

ま、壺はわたしの替わりかね。

トメ

わたしなんか、一人もんだつたろ。羨ましいよ。

婆様

死んだら皆一人もん。でも、誰もが仲間。トメさん、一

緒にあのとぼけた爺様気にしとくれよ。

トメ

いいよ、ウメさん。

爺様

そう言えば、またハニーさん来るって言ってたな。ちよ

つといい感じで・・・ふふ。わしは目利きじゃからの。

(と言って、廁へ行く(下手にはける))

婆様

(怒って) 何が目利きだ。とぼけた爺様と言ったが、こりや色ボケ爺だ。騙されてるとも知らないで。

トメ

まあまあウメさん、見ててやろうよ。どうせ、あの百両。あ、残り八十両か……。貰ったものだろ。

婆様

そうそう、お金なんてあの世にはいらぬ。壺もね。でも、騙されるのは見ていらぬ。どうしよう……。

ハニー

爺様あく！爺様あく！(舞台上手袖より声だけ飛ばす)
(ハニーの、その声に反応し、婆様たち隠れる。)

3 (爺様と「う詐欺団」)

(爺様の家の照明が消え、舞台中央と「う詐欺団」の事務所が明るくなる。音楽が流れ、下手より「う詐欺団」

がダンスとともに登場。「う詐欺団」のダンスは躍動感と可愛らしさ、つくり可愛らしさ・愛くるしさを感じるダンス 一分〜二分

パニーは結構踊るが ハニーは調子よく途中休む。パニーは一生懸命踊っているつもりだが動きが鈍い・・・シラサギのメニーも入るが、見よう見真似の動き。ダンスの後、イメーজダンサー達下手へ退場)

(パニーが自分を見て何か言いたげ。その視線を逸らすように)

ねえパニー。あんたこの頃動き鈍くなってない？

ハニー

パニー

そんなことないもの。ほら・・・(と言って 身体をクネ
らす。)

メニー

※メニーはいるが、見様見真似でダンスをする。

ハニー

そこは、こうでしょ・・・と言ってやって見せる。

パニー

こう？

ハニー

こう！・・・やっぱり太ってきたんじゃない？体大きく

なったでしょ。

パニー

そんなことないも——ん。(と言って体を細く見せよう

とする)

パニー

うるさいわね。あんたたち。仲間同士で何けなしあつて

んのさ。これから仕掛けるんだよ。大事な仕事の前に緊

張感が無いよ、緊張感が。

パニー

だってハニーが私のことデブだなんて言うから。

ハニー

デブなんて言ってないでしょ。

パニー

いや、最近パニーは肉付きが良くなった。動きが鈍い

よ。

ハニー

ほらみなさい。

パニー

いや、ハニーもズルしてるね。身体動かすのごまかして

るの知ってるよ。

ハニー

はい、すみません。しっかり動きます。(急に、上司と部

下の関係になる)

パニー

ははは。

メニー

ははは。

パニー

パニー、忠告！(パニー、シヤキツとなる)動きが鈍く

なったウサギは使い物にならない。元締めに食われちまうよ。

パニー じよ、冗談でしょ。冗談ですよね。（本気で焦る）

パニー ま、これは冗談……。

パニー・ハニー・メニー （三人） 良かった。

パニー でも、気を付けな。近頃元締め怒りっぽいからね。どうなるかわからないよ。

（バルコニー席に、元締めである猪の姿が、残忍な効果音と共に映し出される。）

（ハニー・パニー・メニー三人でぞつとする）

（「う詐欺団」の事務所と中央が暗くなる。）

（爺様の家と中央が明るくなり、四人は、爺様の家の前

の方まで来る。)

じゃ、またやるよ。ここは爺様の家だ。前のエサは壺だ
ったわね。

明の壺です。

確か二十文で手に入れたガラクタです。

あのエサは効いたわね。二十両になったわ。

あの、何か飼っているんですか？

どうして？

だって、エサとか何とか。

そのエサじゃないよ。

じゃ、何のエサなんです？

あの爺様を釣るエサだよ。

バニー

メニー

ハニー

メニー

パニー

メニー

バニー

パニー

ハニー

バニー

メニ―

あの爺様が動物のエサを食べるんですか？

バニ―

そうじゃないよ。エサは爺様の好きなものだ。

ハニ―

メニ―。お前はシラサギだよ。

メニ―

はい、新米のサギ、シラサギです。

ハニ―

じゃ、好きなものは何？

メニ―

わたしは、エードジョウでしょうか。柳川なんていい

な。

ハニ―

それが目の前にあつたら食べたくなるだろう。それをさ

も旨そうに見せて売るんだ。

パニ―

一品 一両とかで。

メニ―

それって・・・サギでしょ。

バニ―

サギ？おい白サギ・・・それがわたしたちの仕事だろう

が。寝ぼけたこと言っていると、お前真っ先に食われるよ。

ひい。やります。サギのわたし、サギやります。

しっ！そこだけ大きく言うんじゃない。

さて、今度は例の仕掛けだよ。

はい

例の仕掛けって？

例の仕掛けって？

屋敷で打ち合わせしてきたじゃないか。しっかりおし

よ。掛け軸の「イロナキ」だろ。と言って掛け軸を放り

投げる。(メニーが受け取る。)

あ、そうか。エサが掛け軸なんだ。どんな掛け軸なんだ

メニー

バニー

メニー

パニー

ハニー

バニー

メニー

ろう……。(と言って見ようとすると、ハニーがそれを
掴んで、開かせずに取ってしまう。)

ハニー

二束三文の掛け軸。それを食べたくなるように仕向ける
のが詐欺師の見せどころよ。(と言って、女の魅力をアピ
ールしながら)「イロナキ」……「色仕掛けと・泣き落と
し」これで、決まり!

パニー

そうでした。

ハニー

わたしが、まず色仕掛け。

パニー

わたしは、泣き落とすその妹。

パニー

わたしが、爺様に金を出させる役。

メニー

あのー。わたしは……。

パニー

お前は、受け子。金を爺様から受け取る役さ。簡単だ

ろ。でも絶対に捕まってはだめだよ。では、手筈通りい
くよ。

ハニー

はい。

パニー

はい。

メニー

はーい。

バニー

頼りないね。でも、仕方がない。まずは、ハニーの出番

だ。行ってきな。

(ハニーが部屋に近づく。)

ハニー

爺様。爺様。

(爺様。 廁から出てきた様子。 手を手拭いで拭いている)

お。 ハニーさんじゃないか。 よくいらっしやいまし

た。 どうぞどうぞ。(と言って手を差し出そうとする)

ハニー
（ハニーはどうしようか考える。が、厠に行った後らし

いので、少し触れる程度。合図が送れる縁側に座る）

婆様たち
（婆様たちは呆れかえり、爺様が敷いた藁座布団を二人

が座る直前に引くなど、ささやかな嫌がらせをする）

爺様
さてさて、今日は何のご用じゃ？

婆様たち
（二人で、目立たぬように爺様にいたずら。例…茶に塩

を入れる）

ハニー
この前の壺。その後の調子はどうかと思ひまして・・・。

爺様
壺の調子？

ハニー
いえ、壺の評判でございますわ。

爺様
これこれ。（見せながら）色合いといい。姿といい。美し

い壺じゃあ。お、そうそう、ハニーさんのようじゃ。

(と言って、茶に口をつける・・・と塩からい)

(婆様たちの嫌がらせは、いいタイミングで成功する。)

まあ、爺様ったらお上手なこと。

ハニー

(渋い顔のまま)なのにな、村ではこの壺をガラクタだ
と言うやつがいるんじや。

爺様

そ、そうですか。

ハニー

「明」なんてとんでもない。ありや俺が二十文で市場で
売った壺だと言うやつもいてな。わしをボケ呼ばわりす
るんじや。そんなことは無いよなハニーさん。

爺様

そうですよ。爺様。これはれっきとした「明」の壺。

ハニー

ほら、ほら・ここ。この高大のところに、「明」と書いて
あるでしょう。

爺様

そいつが言うには、「俺の名前は明吉(みんきち)」だから明と書いた。おらの字に間違いないと言うんだ。

ハニー

その人こそ人を騙そうとしているんですよ。

爺様

そうじゃ。二十両で売れたことをたいそう残念がっておった。

ハニー

そうですよ。

爺様

ん？

ハニー

ん？・・・と、ともかく、これは明。そしてわたしの

つ・ぼ。よく磨いてくださいね。

爺様

そうじゃの。(にやにやする)

ハニー

そうそう。今日はもう一つお話があるの。

爺様

なんじゃ。

ハニー

爺様は、掛け軸なんて興味ある？

爺様

掛け軸か。庄屋様の家で一回見たことがある。ありや猫の絵じゃったな。庄屋様にいい猫の絵でございますね。

と言ったら、こりや「虎」の絵じゃ。と叱られてしまうたが、ありやどうみても猫じゃった。

ハニー

爺様。わたしのお尻を見て。どんな形に見える？

爺様

そうじゃな。丸・・・かな。

ハニー

そうでしょ。丸・・・可愛いでしょ。丸・・・の掛け軸。

わたしみたいな掛け軸を預かったの。ちようどそれを持つてるの。

爺様

ほうほう。見てみたいな。

ハニー

見るだけなら、見せてもいいわよ。預かりものだから、

売れないけれど。

爺様

そう言われると、じっくり見たくなる。

ハニー

本当はね、この掛け軸の名前、「雅の丸」と言ってみせてはいけないものらしいの。

爺様

そう言われると、ますます見てみたいじゃないか。少しでいい。少しでいいから拝ませてくれ。

ハニー

困ったなあ。でも・・・上得意の、いえ目利きの爺様だから、少し見せてしまおうかしら。（と言って思わせぶりに、少しずつ開く）

爺様

ほう！ほう・・・ほう。これが「雅の丸」・・・ただ筆で丸を書いただけのようじゃが。

ハニー

それは、徳の高いお坊様が、気持ちを一平らにして書いた

最高の「丸」なのよ。わたしなど見ただけで、気持ちが高貴に・・・ああ。

爺様

そ、そうかなあ・・・単なる丸のように・・・。

ハニー

ほら、ここ。ここに落款があるでしょ。

爺様

えーと・・・えーと・・・えーと・・・。

ハニー

「うえん」というお坊様。目利きの爺様が兎田の名前知らないはずがないでしょ？

爺様

そ、そりやまあ・・・聞いたことがあるような・・・無いよ
うな。

ハニー

もつと、よく見ているのよ。(積極的に)

爺様

いや、掛け軸はあまり・・・。

ハニー

(爺様に聞こえないように) ちっ、第二弾だ。(外に向か

つて合図すると、パニーが素早く縁側に来る

パニー
ハニー！ハニー姉さん！

ハニー
妹だわ。ここよ。わたしはここよ。

パニー
あ、姉さん。大変なの。

ハニー
どうしたの。

パニー
それが・・・それが・・・。

ハニー
はっきり言いなさい。

パニー
その、掛け軸　いくらで売れるの？

ハニー
え？　えーと・・・まだよ。

パニー
まだ？これが売れないと・・・売れないと・・・えーと。

ハニー
酷い目にあうんでしょ。

パニー
・・・そう。酷い目に。元締めに。

爺様

元締め？何を言ってるんじや、この人は。

(ハニー・パニーを睨む)

ハニー

この子はわたしの妹なんです。パニーって言うんです。

爺様

そうなのか。

ハニー

実は、この子からこの掛け軸預かったんです。

爺様

預かった？

ハニー

この子が、友だちから家宝をお金に換えて欲しいと頼ま

れたらしいので預かったんです。

ほうほう。家宝か。やはりなかなかのものなのかのう。

それで、どうしたんじや急に。

わたしの友だち、姫様なんだけど、売られてしまうの。

え、売られる。どうしてじや。

爺様

パニー

パニー

お父様が亡くなり、お母様が後を追うようにご病気となり、一人残され……。(急に歌舞伎女形風に) あれ、おいたわしや。残ったのがかなりの借金。姫に残されたのは、この「雅の丸」のみ。これを手放さねば、借金を返さねば……。色街に売られてしまうのであります。

爺様

(芝居がかって言葉遣いがおかしくなっている)

いくらで売られてしまうんじや。

パニー

五十両。

爺様

五十両！それは大金じや！

パニー

急がないと姉さん。メニーが売られてしまうわ。

爺様

その姫様がメニーと言うのか。

パニー

ええ。白サギのメニーよ。それは可愛い子なの。

(家の外で、メニーが可愛いポーズをとっている)

爺様

白サギ？

ハニー

白菊のようなメニー。

爺様

白菊のようなメニーさんか。いい名じや。

ハニー

そうですね。ね。爺様・・・優しい爺様。この掛け軸買

ってくださいますか？

爺様

いくらなんだこの掛け軸。

ハニー

それは徳の高い高い高いお坊様がお書きになったので

すから、一まるまる両です。

爺様

一まるまる両？

パニー

百。百両。

爺様

ひや、百両か・・・無理じやあ。

パニー

爺様、爺様。メニーと女衞せけんがそこまで来ているの。わたしはメニーに五十両出せるあてがあると云っちゃったの。そしたら、女衞も一緒に来ちゃったの。

爺様

え、来てるのか。

パニー

女衞の、えーと、パニーさんって言うんだけど、ちょっと怖い。爺様 話してくれる？

爺様

い、いいけれど……何でわしが……。(と言っている間にパニーが入って来る。)

パニー

ちよつと、聞こえたわよ。女衞女衞って人聞きの悪い。わたしは、人材買い付け社中の大番頭よ。価値のある人材を探して売り飛ばす。……じゃなかった、手配する。手配師のパニーと呼んで……。(と見得を切る)

ところで、爺さん。

爺様

じ、爺さん？

バニー

いや爺様。話しは聞いたよ。なかなかいい掛け軸みたい

じゃないか。その掛け軸買うのかい。

爺様

いや、百両なんて大金、わしは持ってない。

バニー

え、百両かい。さぞ名のある逸品なんだろう。

ハニー

「雅の丸」って言うんです。

パニー

徳の高ーい坊主が書いたの。

バニー

わかった。じゃ、私が八十両でその掛け軸を買おうじや

ないか。

パニー

え、買ってくれるの？・・・でも二十両足りないわ。

バニー

それじゃ、こうしよう。わたしがこれを買ったつもり

で、わたしが爺様に売る。爺様は80両で私から買う。
いいかい。

(爺様はよく考えてる)

さつき百両でこんどは八十両、安いでしょ。

うん。そうじゃの。

爺様はメニーを救いたいよね。

ま、成り行き上。

爺様は八十両をわたしに払う。わたしが不足分の二十両
をこの姉妹に払う。それで、百両。文句無いな。

(うなづくハニーとパニー)

八十両のうち五十両はメリーの借金にもらう。

そして、……ええい。残りの三十両は爺様に返してや

らあ。どうだ。それで……。

(メニーは入ろうとするが、きっかけがつかめない)

と、言うことは。(手で計算を始める)

百両の名のある掛け軸が安く手に入るということだ。

い、いくら払えばいいんだ。

まずは私に八十両。そのうち、五十両をわたしがもらっ

て、三十両はそのあと爺様に返す。

(3人はじつと爺様の表情を見る)

(さつきから、婆様たちが爺様の思考の邪魔をしてい

る)

(見えない婆様たちに向かって) ああもおくうるさいな

あ!!

パニー

誰と話してるの？

爺様

誰とも話とらん。うゝゝん、何だか、わからなくなつて

しまった。

バニー

(ハニーたちに向かって) ちょっとボケ過ぎなんじゃないの爺様。

困ったわね。お金の計算でつまづいちゃったわよ。

ハニー

(タヌミとポン子、舞台下手奥より登場し、メニーに何やら話し掛ける)

なあ、パニーさん。メニーさんってどこの家の姫様じや？

爺様

それは、その 大きな屋敷のある・・・ほら、武家町の

・・・白鷺しろたけさま。

パニー

爺様

白鷺様？さつき、白菊のメニーと言わなかったか。

ハニー

そ、そう。白菊メニー様

バニー

何で、メニー入って来ないんだろ？ちよつと、パニー見て来て。

パニー

(パニー、出て行く)

爺様

あんたたち、お知り合いかい？

バニー

いえ、そういうわけじゃなくて。

爺様

何か変だな。

バニー

(ハニーを向いて) だめだわこれは。仕方ない。金の話は後にする。

ハニー

爺様。お金の話は後で。今度はメリーを連れてくる。会ってやってちょうだい。可哀そうな子なんだから。

爺様

いいけど…。

バニー

爺様、また後できますよ。掛け軸のこと、考えて。

(外へ出て行こうとする)

(爺様の家が暗くなる)

4 (タヌミのゆれ)

(タヌミとポン子がいるところにバニーたちがやって来る)

バニー

メニー！遅れちゃ駄目じゃないか。全く使い物にならない

いね。おや、だれなんだい、この子たち？

メニー

仲間になりたいって言って来たんですよ。

パニー

そんなの後にして。

ハニー

もう遅いよ。仕事は絶妙の段取りとたたみ掛ける迅速さが勝負。作戦は立て直し。あの爺様の家は何か変。邪魔が入るみたいでどうも上手くいかないんだよね。

ポン子

あのー。

タヌミ

あのー。お姉さんたち、ウサギ(う詐欺)ですよね。

メニー

わたしは白さぎ。

ポン子

わたしたち、仕事探してるんです。

パニー

仕事なんてガキができる簡単な仕事なんて無いのさ。ど

つかで遊んでな。

ハニー

おや、お前たちはタヌキだね。

タヌミ

はい。

バニー

ひよっとして・・・あの「カチカチ山」のタヌキの知

り合いかい？

はい。父ちゃんです。でも父ちゃんは、人殺しはしていません。

そうかい。父ちゃんかい。ってことは娘だね。

はい。タヌミって言います。

私はその娘の友だちのポン子です。

「カチカチ山って」？

・・そういう山があったという話だよ。

どうするバニー。

どうしようかね。

そうかい。あの「カチカチ山」の・・・。

何か有名な話なんですか？

メニー

バニー

ハニー

バニー

パニー

ポン子

タヌミ

バニー

タヌミ

ハニー

おや、知らないの？わたしたちとっても大事な話さ。あ

んたたち、本当に仕事手伝いたいの？

わたしたちの仕事のこと知ってるのかい？

ポン子

詳しくは知りません。

タヌミ

でも、しっかりした人たちだなあと。強い女を感じま

す。それに・・・

メニー

それに？

タヌミ

人間にいたずらしたくって。「カチカチ山」のタヌキの娘

じゃ駄目ですか？…人間なんて大嫌い！

ハニー

(ハニーに) 金を受け取る役はどお？

バニー

受け子か。それもいいね。詐欺は、仕掛ける人数が多け

れば多いほど上手くいく。タヌキの子だろう。上手く利

用して、その後またこの子たちのせいにすればいい。

じゃ、仲間に入れようよ。

それがいいです！

その前に、作戦練り直し。・・屋敷に戻るよ。

はい。

タヌミとポン子。元締めに頼んでみる。付いといで。

はい。お願いします。

(タヌミたちに)

あなたたち、ちよつと上の方と相談するから、ほら、あ

の山の麓で待ってなさい。

はい。

はい。

ポン子

タヌミ

バニー

タヌミ・ポン子

ハニー

パニー・メニー

バニー

メニー

ハニー

(タヌミ達、舞台下手奥へ一端ハケる)

(うさぎ達、屋敷へ向かって歩き出す)

なかなか素直な子たちじゃなですか。

きつと受け子、うまくやりますよ。

でも、あのタヌキの子どもだからね。ぼうつとしている

かもしれないよ。

ぼうつとしてたんですかあの子の父親。

そうさ。だから騙されたんだよ・・・私たちの親に。

(バニー、高笑いをしながら、4羽は上手へ去る)

5 (兄と妹)

(タヌミとポンコが下手奥から出てくる)

ポン子

タヌミ、いいの？

タヌミ

何が？

ポン子

あの人たちの仲間になって・・・。

(少し考えて、急に大人びた感じで)

タヌミ

いいのよ・・・わたしは、わたしなんだから。

ポン子

だって、あの人たち悪そう。何か、ずるい感じしない。

タヌミ

かっこいいじゃない。大人の女って感じがするわ。憧れ

るなあ・・・あんなかっこいい女の人たち。

ポン子

そうね。できる女って感じもするわよね。

タヌミ

仕事、手伝うわよ・・・。

(二人が話して、山の麓へ向いだす途中で、タヌオが爺様

の家の裏手から登場する。実は裏手で様子を見ていた。

タヌオ

(二人を呼び止める) タヌミ!

(二人は驚いて振り返る)

タヌミ

お兄ちゃん……。どうしてここにいるの?

タヌオ

ま、そのなんだ……。えーと……。柿を採りにきたん

だ。あ、そちらの子は たしかポン子さんだね。こんに

ちは。

ポン子

こんにちは、お兄さん。

タヌオ

ポン子さんはあいかかわらずえーと……。可愛いね。

ポン子

ありがとうございます。みんなによくそう言われるんで

す。

ポン子

そうそう、タヌミもよくお兄さんの話するんですよ。優

しいとか、誰にでも親切にするとか、押しつけがましい・・・とか・・・あつ。

(タヌオ、タヌミを見る)

ごめんなさい。えーと・・・腰が低いとか・・・卑屈だとか・・・あつ。

(タヌオ、ため息)

だって、そうじゃない。卑屈で、押しつけがましいじゃない。

わたし、悪いこと言っちゃった。・・・ごめんなさいお兄さん。

謝ることないわ。わたしは本当にそう思ってるんだから。

タヌミ、お兄さん優しくして誰にでも親切っていつも言っ

てるわよね。

タヌミ

そうよ。でも、それいい事ってちつとも思っていない

わ。お兄ちゃんもね、薪拾いを手伝おうとしたの。魚を獲るのを手伝おうとしたの。

ポン子

ほら優しいじゃない。

重い荷物を持たされたり、遠くの山までキノコ採りに行かされたり、酷い仕事ばかり。

タヌオ

父ちゃんは・・・父ちゃんのそのまた父ちゃんも、手伝

ってきたんだ。薪や藁や萱を運ぶのを。タヌキは親切なんだ！

タヌミ

それが何よ。火をつけられたじゃない。背中に火傷をおったじゃない。拳句の果てに、魚を獲りに行って、泥の

舟に乗らされて、死んでしまったじゃない。

タヌオ

悪いことをしたタヌキと間違われてしまったんだ。おば

あさんを死なせたと思われて、憎まれて・・・。

タヌミ

誰も信じてくれないじゃないの。親切な優しいタヌキだ

ったなんで誰も言わない。皆、いたずら好きの人殺しの

タヌキだっけいまだに言ってるじゃない。

タヌオ

タヌミ・・・お前だって人殺しじゃないって、わかって

いるだろ。

ポン子

わたしも、ぜったい違うと思います。

タヌオ

俺は、父ちゃんを信じてる。だから、親切は続ける。

タヌミ

でも、お兄ちゃんは全然反論しない。ちっとも悪くない

のに、いつもおどおどしている。優しいタヌキでも、親

切なタヌキでも、卑屈なお兄ちゃんはキライ。

タヌオ
あのな、タヌミ。そりやタヌミから見ると不甲斐ないお兄ちゃんに見えると思うだろうけど、お兄ちゃんには決めたことがある。

タヌミ
また、あれ？

タヌオ
そう、あれだ。一つ。人間とは、もう関わらない。動物の手伝いはしても人間の手伝いはしない。二つ…。

タヌミ
「妹には、タヌキの悪い伝説を背負って欲しくない。」でしよ。そんなことわかっているわよ。でも、もう背負っているわよ。仲良くしてくれるのは、このポン子だけだもの。

ポン子

わたしは、信じるよ。タヌミの父ちゃんの無実。タヌミ

タヌオ
はいつも泣いてるもの。

じゃあ、兄ちゃんの言っていることもわかるよな。人間はタヌキを誤解してる。第一、父ちゃんはタヌキ汁にされそうになったんだ。

タヌミ
当たり前。タヌキは人間を化かすと思われているじゃない。だから、わたしはちゃんと人間を化かしたいの。

タヌオ
でも、さっきの・・・あのうさぎ達は信じちやいけない。

タヌミ
あの人たちも人間を化かそうとしているんだもの。手伝いたいわ。

タヌオ
ばか！本当の悪いタヌキになってしまうぞ。

タヌミ
ほんのいたずらよ。いたずらの手伝いよ。

タヌオ

そんな軽いもんじゃない。あのうさぎ達には悪い噂がある。言うこと聞いちゃいけない。

タヌミ

それが、押しつけがましいと言うのよ。ポン子。行きましょ。

ポン子

でも、お兄さん、タヌミのこと、心配してるわよ。

タヌミ

いいの。わたしは私で生きるの。迷惑だわ。山の麓に行かなくちゃ。

タヌオ

(タヌミはポン子を促しながら上手へ去る)
タヌミ！タヌミ！！

6 (婆様たちとタヌオ)

（一人うなだれ取り残されたタヌオ。しかし、いつのま

にか後ろに二人の婆様が立っている。下手へ行こうと振

り向いたところでに婆様たちが立っていて驚く。）

わあ！

わあ！

（三人で驚いて、お互いに飛びのいてしまう。）

誰です………。

わたしたちが見えるのかい。

ええ。

見えるらしいよ。

どうしよう。

どうしよったって……好都合じゃないか。

タヌオ

婆様

タヌオ

婆様

タヌオ

トメ

婆様

トメ

タヌオ

あのお：僕は、美味しくなんかありませんよ。

婆様

食べないよ。

トメ

食べないよ。・・だって歯が無い。

婆様

違うだろ。わたしたちは生きちやいないんじや。

タヌオ

生きちやいないというと・・・。

トメ

死んでいるのさ。

タヌオ

じゃ・・・じゃ、幽霊！

トメ

そうそう。

タヌオ

ひえー！

(慌てて逃げ出そうとするが、今度はタヌキの腰が抜けて立てない)

タヌオ

あの、あの、僕は、いえわたしは、悪いタヌキではあり

ません。

ふーん。そうかね。

ぜったい違います。

お前の父ちゃん、「カチカチ山」のタヌキだろ？

違います。

人間に悪さしたタヌキじゃないのかい。

父ちゃんは、悪さなんかしていない！・・・あつ。

(少し間を空け)

そう、お前の父ちゃんは悪さなんかしてはいない。でも

なんで「カチカチ山」のタヌキじゃないと言うんじや。

それは・・・みんなが。婆様たちだって、父ちゃんが悪

いタヌキだって思っているでしょ？

トメ

タヌオ

婆様

タヌオ

トメ

タヌオ

婆様

タヌオ

婆様

だから、お前の父ちゃんは悪さなんかしてないと言っているんじゃない。

タヌオ

えっ・・・婆様はだれ？

婆様

あの「カチカチ山」婆様じゃ。

タヌオ

えっ？…カチカチ山の…婆様…。

婆様

タヌキの息子。たしかタヌオじゃったね。

トメ

そう、タヌオじゃ。

タヌオ

は、はい。(少し顔を上げる)

(婆様、座って近づく。タヌオは思わず後ずさり)

婆様

・・・あのな。タヌオ。(さらに近づく)よく、聞くんじゃない。

や。いや、聞いてくれ。わしの頼みを聞いてくれ。

タヌオ

何でしょう。

婆様

タヌオ

カゲアナ

爺様を・爺様を助けてくれ。

え？

— 暗転 —

ここで、十五分間の休憩をいただきます。

お手洗いはホール入り口を出て右側。

お飲み物コーナーはホール入り口を出て左側にございます。どうぞご利用ください。

二幕開演五分前に予ベルが鳴りますので、お席にお戻りくださるようお願いいたします。

第二幕

7 (懇願)

婆様 な、そう言う訳だから、爺様を・・爺様を助けとくれ。

トメ 助けてやっておくれよ。

タヌオ でも・・・。

トメ ね、頼むよ。

タヌオ だけど・・・。

トメ でもも、だけでも無い！年寄りが二人こうやって頭を下

げているんじゃないか。

婆様 駄目だよ、トメさん脅かしちゃあ。

トメ そ、そうだね。・・・ごめんよタヌオ。あいつらは悪い

奴やだからさ。本当に頭にきてんだよ。

タヌオ 僕に、お爺さんを助けるなんてこと出来ませんよ。

トメ

でも、「カチカチ山」のタヌキの息子だろ？お前のお父つ
つあんは、うさぎ達にやられたんだろ。泥の舟に乗らさ
れて、沈んだんだ！

タヌオ

今でも父ちゃんは沈んでる！…舟と一緒に…。

トメ

だったら、助けてやっておくれよ。

タヌオ

婆様方の、爺様へのご心配はわかります。あのうさぎ達
も、とても怪しいと思います。でも、何で僕が爺様を助
けなくちゃいけないんですか？

婆様

タヌオ・・・、お前が本当は優しいタヌキだということ
を知ってるよ。

タヌオ

僕は、優しくなんか無い。

婆様

いや、あのタヌキの息子だろ。人間の手助けをいっぱい

していたタヌキの息子だろ。いたずら好きだったが、劇
軽で皆を笑わせたり、稲刈りや魚とりのきつい仕事も手
伝ったりしてたよね。

トメ
でも、爺様はその父ちゃんを捕まえ、タヌキ汁にしよう
とした。

婆様
あれは、うさぎが悪いタヌキだと嘘をついたからさ。タ
ヌキ汁は美味いと言ったからさ。

トメ
いや、タヌキ汁は美味しくないよ。そう、うさぎ。ウサ
ギ汁の方がよほど美味いさ。

婆様
爺様は少しボケているからね。だから、うさぎに騙され
て・・・。

トメ
そう、ボケてるね。ありや騙され易いね。詐欺にあうつ

てのはああいう人だね。

婆様

爺様はね、働き者だけれど報われない人。タヌオ、

あんただって働き者なのに・・ね。

タヌオ

僕は、報われなくていい。うさぎは好きじゃない。人間

も好きじゃない。関わりあいたくないんです。

婆様

私が、なんで死んじまったか知ってるかい？

タヌオ

知りません。

婆様

熱湯をかぶったからさ。大やけど。それはそれは熱かつ

たよ。口もきけず、弱り果てて死んでしまった。

乱暴な猪にやられたんだよ。あんたの父ちゃんを逃がそ

うとしていたときにね。

タヌオ

え？お婆さんが助けてくれたんですか。父ちゃんを。

トメ

あんたの父ちゃんは逃げて・・・でも、うさぎに騙されて・・・泥の舟で沈んじまったんだって。

婆様

死んでからわかったんだが、猪とウサギは仲間だったんだ。

トメ

爺様は騙される。婆様は大やけどをさせられる。あんたの父ちゃんは殺される・・・。

タヌオ

・・・でも、僕は・・・関わりあいたくない。

婆様

いや、お前の妹がうさぎたちと関わろうとしているよ。

爺様を騙す仲間として。

タヌオ

そんなことは絶対にさせない！

婆様

じゃ・・・爺様も助けておくれよ。お願いだよ。

タヌオ

いや、それは・・・(葛藤し歩き回る)

わかりました。でも・・・どうやって助ければ・・・。

僕は・・・勇気が無い。

お前は、変装が上手だろう。何となくタヌキっぽいが、

村の役人とか言って・・・。

僕は、騙すのはいやです。

でも、タヌキとわかったら・・・

わかったら？

汁だね。

爺様は、まだタヌキ汁が美味しいと思ひ込んでる。

ええー？

(暗転)

婆様

タヌオ

婆様

タヌオ

トメ

婆様

タヌオ

8 (再び「詐欺団」)

(爺様の家、明転)

爺様・・・爺様・・・爺様

なんじゃ、あんたは。

えっと、村役人の・・・タヌ・・・

タヌキ？

いえ、・・・タヌ・・・そうだ、キヌタ・ハチジヨウです。

キヌタ・ハチジヨウさん。・・・何の用で？

それだ。爺様、最近何かを買わされたことはありませんか？

買わされたこと・・・買わされたことは無いなあ。

爺様

タヌオ

爺様

タヌオ

爺様

タヌオ

爺様

タヌオ

タヌオ

安い物を高いものと偽って買わされるらしいんです。

爺様

うゝん。やっぱり無いな。価値のある壺を買ったことは

あるが、買わされてはおらん。

タヌオ

いや、それは買わされたんじゃないんですか。上手く騙されるボケた年寄りが多いそうです。

爺様

わしやボケとらん！じゃから、わしは騙されん。

タヌオ

いや、やはり爺様はボケているらしくて・・婆様たちが

心配して・・。

爺様

婆様たち？何を言ってるんじや。婆様は5年前に死ん

だ。わしや一人もんじや。村の皆がそれを知っとる。

お前こそ怪しいな。

タヌオ

僕は、婆様たちに頼まれて・・。

爺様

婆様はおらんとおっしゃるじゃろう。第一、婆様たちは誰のことじゃ、婆様たちとは。

タヌオ

いえ、だから……。

爺様

お前、なんかタヌキに似てるのお。わしを騙しに来てるんじゃないのか。

タヌオ

そんな事……ありません！

（爺様とタヌオ、ストップモーション。爺様の家の照明が暗くなり、代わりに舞台上手と中央の照明が明るくなり、う詐欺団」ダンスチームとともに再び登場し、第一幕とは異なり、露骨にカッコいい悪のダンス。二分）

（二分の踊りが終わると、ダンスチームがサッと上手にハケる。残ったのは、バニー・ハニー・パニー・メリ

ー・そしてタヌミとポン子)

(爺様の家の照明が再び明るくなり)

とにかく、騙されんよう詐欺には気をつけて詐欺には。

(言いおいて、爺様の家から出て行こうとする。)

タヌオ
バニー
おや、そこにいるのはタヌキじゃないか。何をしている

んだ、こんなところで。

タヌオ
何でもない。(立ち去ろうとする)

ハニー
あんた、爺様の家から出て来たねえ。何をしていたんだ

い？

タヌオ
何もしていない・・・そこを退いてくれ。

(舞台上手に行きかける。すると、迫力のある照明と音

楽。上手から元締め猪之助が派手な服装で登場する。)

猪之助

おやあ……お前は……「カチカチ山」のタヌキの息子じゃないか？

(タヌミとポン子 はつとする。)

猪之助

やはりタヌキ……息子だな。

(タヌオ、通り過ぎて行こうとする。)

猪之助

待て！

タヌオ

ちがう。僕はそんなじゃない。僕は、「カチカチ山」の

タヌキなんて知らない。

猪之助

そうか、よく似ているように思うが、お前たちはどう

だ。

(バニー、近づいて見る。確信したように)

バニー

あのタヌキによく似ています。

(ハニー、もっと艶めかしく近づいて)

そうよ、目もとがそっくり。気弱そうなところもね。

(パニー、臭いを嗅ぐ)

わたしはよく知らないけど、タヌキねこの臭い。

(メニー、挨拶をする)

よろしくー。

猪之助
タヌキだとはわかっている。確かあのタヌキには息子と

娘もいたはずだ。

タヌオ兄ちゃん。

タヌミ・・・。

タヌオ兄ちゃん？

お前たち兄弟だったの？

パニー

兄と妹

メニー

そうすると……。

猪之助

そうだ、「カチカチ山」のタヌキの息子と……娘。

ポン子

ちよつと、タヌミ。やばいわよなんか。このムード。

タヌオ

タヌミ、どうしてここにいるんだ。

タヌミ

……、ほつといてよ。私たちは、この人たちの仲間にな

るんだから。

タヌオ

私たち？

ポン子

私も一緒にです。

タヌオ

だめだ。こんな連中と一緒にいるんじゃない。

ハニー

こんな連中？

パニー

こんな連中とは何よ。私たちは、ウスノロのあんたとは

違う。

違うんだから。

すばしこいのよ。

頭もいい。

いいの？

あんたは別。

お前、今爺様の家から出て来たな？何をしていた？

何もしていない。

あの「カチカチ山」のタヌキの息子が爺様の家に入るはずがない。爺様には恨まれているからな。

僕は、恨まれることなんかしていない。

じゃ、何をしていたの？

タヌオ

タヌオ

猪之助

タヌオ

猪之助

タヌオ

メニ

ハニ

パニ

メニ

タヌミ

お兄ちゃんは、人間とかかわりあうなと言っているじゃない。父ちゃんが酷い目にあつたからでしょ。

タヌオ

いつもそう言ってるだろう、タヌミ。

ハニー

やはり、あのタヌキの息子。

猪之助

お前が、爺様の家に入ろうとしたのは、騙そうとしてだろう。

タヌミ

お兄ちゃん、そうなの。わたしには綺麗ごとと言って、自分だって関わってるじゃないの。

バニー

お兄さん、やるわねえ。

タヌオ

違うタヌミ！僕は……ただ。

ハニー

ただ、何よ。

パニー

何なの。

猪之助

メニー

よし、タヌオと言ったな。爺様の家で何をしていたか、教えてもらおう。屋敷まで、連れて来い。

せっかく、爺様の家まで来たのに引き返すの。バツカみたい私たち。

（元締め、メニーを呼ぶ。「可愛い奴だ」とか言いながら、一緒に歩いて去る）

（パニーとハニー。何かぶるつと震え、タヌオを連れて行く。パニーは、タヌミたちと何か話しながら上手へ去る）
（暗転）

9（絶対絶命）

（「う詐欺団」の事務所、明転）

（タヌオが、広く取り囲まれているが、既に痛めつけられて
いる様子）

早く、言いなさいよ。

爺様の家に一体何をしに行ったの？

詐欺でしょう。詐欺。

サギと言えば、シラサギのメニーどこへ行ったのかし
ら。

帰った時から姿が見えないのよ。

先に元締めと帰ったはずよね。

え？

え？

パニー

ひよっとして……。

ハニー

そんなこと……。

バニー

元締め、機嫌がこの頃悪いから……。

パニー

(三人は、ぶるっと震えるが、想像したことを打ち消そうとして、焦るような、恐れるような、イライラして)早く、言いなさいよ。

ハニー

何しに行ったの？って何回も聞いているじゃない。

バニー

爺様を騙しに行ったんでしょ。一人でできるわけないじゃない。

ハニー

チームワークが大切なよ、チームワークが。

パニー

私たちも、一人でも欠けるとね……。あー、早く言っつてよ。答えないと、答えないと……。

タヌミ

お兄ちゃん！

ポン子

お兄さん！

タヌミ

お兄ちゃん。言わないともっと酷い目にあいそう。

ポン子

痛いのはいけません！

バニー

何？お前たちも、痛い目にあいたいかい？

（問答しているところへ、元締め猪之助登場。例の照明、音響はパターン化している。ジョーズのようなもの

の・・・箸のような大きな爪楊枝で、歯の食べかすを取りながら登場）

猪之助

どうだ、吐いたか。

（バニーたち三人は顔を見合わせる。何か、ぞつとして

落ち着かない様子。）

バニー
いえ・・・まだ。

猪之助
な・・・に？

バニー
あと、もう少しで口を割るはずです。

ハニー
絶対口を割らせます。

パニー
ほら、もう口を割りかけています。（と言ってタヌオの口をのぞき込む）

猪之助
パニー、ちよつと・・・。（と言ってパニーを近づけ、肉の付き具合をみたりする）

パニー
わ、わたしは・・・美味しくありません。

猪之助
ほう、メニーよりか。

バニー
やっぱり。

ハニー

やっぱり、メニーは……。 (わからないように泣

く) いい子だったのに。

バニー

元締め、それはあまりに……。 (怒りを覚え、反論しよ

うとする)

猪之助

妹だ。

バニー

はい。(氣勢を削がれる)

猪之助

タヌミとか言ったな。妹を使え。

ハニー

どういうことで……。

猪之助

妹を痛めつけろと言っているんだ。そうすれば、喋る。

パニー

妹は知りませんよ。

バニー

妹のタヌミは兄貴のタヌオと喧嘩しているようですが。

猪之助

ばか。この男は妹思いだ。きっと喋る。おい、タヌオと

か言ったな。これから、そこにいる妹を痛めつける。話
すか？

(恐怖心を抱くタヌミ。)

(バニー・ハニー・パニーが恐怖に駆られて、妹に近づ
こうとする)

お兄ちゃん。

タヌミ。・・・やめろ。タヌミに手を出すな。

いいから、タヌミを椅子に縛り付けろ。

タヌミ、だから言ったじゃない。この人たち悪い人よ。

命なんて何とも思っていない。

違う。

違う。違う。

タヌミ

タヌオ

猪之助

ポン子

バニー

ハニー

パニー

違う。違う。違う。

猪之助

違わない。お前たちの価値など大したことは無い。

タヌキは、タヌキ汁。ウサギはウサギ汁。俺は猪だ。猪の肉はぼたんだ。ぼたん汁じゃない。知ってるか・・・ぼたん鍋だ。そもそも肉が高級なのだ。お前たちは単に汁・・・だ。格が違う！

ポン子

何なの、この元締め・・・まともじゃない。

タヌオ

やめろ。わかった。話すから、タヌミには手を出すな。

猪之助

話せ。

(考えついでことを話す様子で)

タヌオ

僕は・・・爺様を騙そうと思ったんだ。

猪之助

やっぱりな。

タヌオ

僕は、人間が嫌いだ。父ちゃんを、タヌキ汁にしようとした。

猪之助

そうだな。それで、どんな手を使おうとしたんだ。

タヌオ

えーと、婆様に頼まれて、本物の・・・舟。そうだ本物の黒い舟を売ろうとしたんだ。

猪之助

黒い舟？

タヌオ

父ちゃんが死んでから、僕が・・・大事に磨いていた舟だ。

タヌミ

お兄ちゃん、あれは泥の・・・。

タヌオ

いや！…大事な舟。黒光りするまで磨いた僕が作った舟。

猪之助

へえ、そうか。それを売ろうとしたのか。うまく売れそ

うか。

いえ、婆様に頼まれてと言ったら、婆様は死んだ。嘘をつくなと言われ、出て来たんだ。

婆様はな、俺が殺したんだ。生きてるはずが無い。

やっぱり。

ひどい。

なんて元締め。

おい、タヌオ。見込みがありそうだ。お前、俺たちの仲間にならんか。

仲間に？

そうだ。仲間になり、上手く爺様から金を奪えれば、妹を自由にしてやる。

猪之助

タヌオ

猪之助

バニー

パニー

ハニー

猪之助

タヌオ

タヌオ

妹を……。やる……。やります。爺様を騙し、金を貰

う役もやります。

猪之助

そうか。やるか。人間、必死になるとやる気になるもん

だのう。お前ら！

パニー

は、はい。

ハニー

頑張ります。

バニー

。。。。

猪之助

タヌオ、どんな手でいくんだ。

それは……。内緒です。任せて下さい。

猪之助

わかった。

(タヌオ、舞台上手にハケる)

おい、バニー・ハニー！

パニー・ハニー

はい。(二人揃って)

猪之助

タヌオの首尾を見届けて来い。

パニー・ハニー

わかりました。

パニー

タヌミたちはどうしますか。

猪之助

タヌオが裏切らんように、一緒に連れていけ。

パニー・ハニー・パニー

はい(三人揃って)

猪之助

俺も、後から行く。金が手に入ったら知らせろ。パニー

パニー

(パニー、激しく首を振る)

ハニー

いえ、わたしが。

猪之助

何?・・・いいだろう。

ハニー

はい。

(緊迫した状況を表す照明と音↓暗転)

10 (タヌキ質)

(中央明転)

(タヌオが爺様の家に向かおうとするのを、バニーが呼び止める)

タヌオ。待つて、タヌオ。

何ですか。

・・・この二人を連れて逃げなさい。

どうして・・・。

いいから、今しか逃げる機会は無いのよ。

でも、いいんですか？

タヌオ

バニー

タヌオ

バニー

タヌオ

バニー

バニー

元締めは、まともじゃないわ。仲間を平気で食べてしまった。婆様を死なせた。あれはタヌキが殺したと本当に思っていた。でも、元締めがやったことだった。

タヌオ

僕たちが逃げたら、今度はあなた方が殺されるかもしれない。

バニー

わたしは「う詐欺団」のリーダーよ。元締めを騙してみせる。

タヌオ

いえ、そんな簡単には・・・。

バニー

私は、詐欺が楽しかったの。そりゃ悪いことだけども、なんか・・・役者みたいじゃない。自分じゃない自分をやってみたかったの。殺しなんてやりたくない！人間を憎んでなんて・・・恰好つけた言い訳。

パニー

私も食べられたくない。うまく演技できないけれど。タ

ヌキやキツネが羨ましいわ。演技上手いんだもの。

パニー

私も、研究したわよ。さ、行きなさい。

(タヌオ、タヌミとポン子を連れて逃げようとする)

(行きかけて、止まる)

パニー

早く行きなさいよ。

パニー

行きなさい。

タヌオ

いえ・・・僕は・・・逃げない。

パニー

何言ってるの？

ポン子

え？

タヌミ

お兄ちゃん！

タヌオ

僕は・・・逃げない・・・。

バニー

逃げないでどうするの？

パニー

今しか・・・。

タヌミ

お兄ちゃん、早く逃げようよ。

ポン子

殺されてしまいます。

パニー

もうすぐ・・・来ちゃうわよ元締め。

タヌオ

爺様の家に行く。

バニー

どうして？

タヌオ

行かないと。・・・あなたたちも、きっと。

バニー

大丈夫って言ってるでしょ！

タヌオ

いや、大丈夫じゃない。・・・聞いてくれ、タヌミ。

お兄ちゃん、弱い兄ちゃんだった。逃げて、逃げてばかりいた。でも、もう逃げたくないんだ。

タヌミ

じゃ、どうするの？

タヌオ

逃げないで・・・元締めと戦う。

パニー

馬鹿言わないで。あなたがあの元締めに勝てる訳がないじゃないの。

パニー

そうよ、バシッとやられて、食べられちゃうわよ。

タヌミ

お兄ちゃん。

ポン子

お兄さん。

タヌオ

僕が、爺様の家に行ってお金を貰う。そのお金を利用する。

パニー

どういうこと？

タヌミ

何をするのお兄ちゃん。

タヌオ

大丈夫だ、タヌミ。そのお金をエサに元締めを騙す。

タヌミ

そんなこと出来るわけないじゃない。

バニー

騙せるはずないでしょ。

タヌオ

いや、騙せる。

ポン子

タヌミ、今しか逃げられないわ。行こうタヌミ。

タヌミ

お兄ちゃん…。

タヌオ

いや、待ってくれ二人とも。あの元締めは、普通じゃない。

い。きつと、どこまでも追い駆けてくる。

皆が食べられないようにするには、戦うしかないんだ。

僕が、お金で元締めを騙す。その隙に逃げるんだ。

出来っこ無いわ。

そんなこと出来ないに決まってる。

タヌオ

いえ、出来る。出来ます。・・・やる。信じてくれタヌ

ミ。ポン子さん。バニーさんたち。

（元締めが近づいてくる音楽。恐れおののくバニーたち）

来ちゃった。

元締めが来ちゃった。

お兄ちゃん。もう間に合わないわ。

（元締め上手奥から登場・・・一人。やはり大きな楊枝を持っている。）

どうだ首尾は。

あの、ハニーは？

知らん。

どうして・・・。

バニー

猪之助

バニー

猪之助

タヌミ

パニー

ポン子

猪之助

替わりはいくらでもいる。現にそこにも仲間になりたが

っている奴がいるじゃないか。(と言って、タヌミたちに

近づき)二人去って、二人入る。詐欺師も鮮度が大切な

んだ、鮮度が！(バニーを睨みつける)

(バニーも元締めを憎しみの目で睨む)

タヌオ

バニーさんたちと、打ち合わせをしました。これから

爺様の家に入るところです。

猪之助

おお、そうか。それで、どうやって金を・・・いくらま

きあげる？

タヌオ

お金は・・・うまく貰います。方法は任せてください。

八十両・・・そう、八十両を貰います。

猪之助

おお、大した金じゃないか。

ポン子

八十両？

バニー

ばか、八十両なんて無理よ。

タヌオ

いや、やります。元締め。その八十両を渡したら、妹た

ちを逃がしてくれますか？

猪之助

当たり前だ。そういう約束だ。

パニー

嘘に決まってるじゃない。

バニー

詐欺師の元締めよ。

猪之助

何か言ったか！

パニー

いえ、何も。

バニー

約束は守ったことが無いと・・・。

猪之助

なにい！

パニー

いえ、守るはずだと。

タヌオ

僕が、八十両を持って行きます。そこで、元締め待って

てください。

猪之助

どこへ行けばいいんだ。

タヌオ

舟です。

猪之助

舟？

タヌオ

黒い舟です。

(タヌミがはっとする。)

猪之助

ああ、さっき言っていたお前の詐欺のエサだな。

タヌオ

はい、爺様の詐欺のエサです。

猪之助

どこにあるんだ。

タヌオ

爺様の家の裏に池があります。その、ほとりに隠してあります。

猪之助

ほお、どうやって隠してあるんだ。

タヌオ

濡れないように油を塗って、藁をかけてあります。藁の

舟のように見えますが、中身は黒光りする舟です。

タヌミ

お兄ちゃん、だからその舟は・・・。

猪之助

その舟がどうかしたのか。

タヌミ

・・・とても大事な舟だと・・・。

猪之助

よし、決まった。その舟もいただく。それでいいな。

タヌオ

はい。

猪之助

では、行け。

(タヌオ、舞台下手奥にハケる。)

猪之助

お前達、行くぞ！ハア〜ツハツハ！(と高笑いしながら

ら、猪之助一行、舞台上手奥へハケる)

(爺様の家だけに明かりが灯き、タヌオだけ爺様の家に
向かう。)

11 (脅し)

タヌオ

爺様、爺様――！

(爺様が出てくる。爺様と一緒に婆様も出てくる)

(婆様たちは、タヌオを見ると、拜む。)

(タヌオはそれに気付くと、大丈夫という仕草をする)

なんじゃ。またあんたか。たしか、村役人の・・・。

はい、キヌタ・ハチジョウです。

今度は何の用じゃ。

爺様

タヌオ

爺様

タヌオ

やっぱり、詐欺が流行ってしましてね。騙して、ひどい掛け軸なんかも売りつけたりするようです。婆様たちが言っていました。

爺様

だから、婆様はもういないと言ったじやろう。

タヌオ

他の家の婆様です。婆様だって皆騙されているんです。

爺様

ふーん。掛け軸のう。．．．どんな奴が売りつけにくるんじや。

タヌオ

何でも、ウサギのように可愛らしい女だそうで。

爺様

ウサギ．．．女．．．可愛い．．．

(婆様が、その場で爺様の腕を抓るふり)

爺様

(すると何故か爺様は痛がり)いててて．．．(不思議そうにあたりを見回す)。そ、そうか、詐欺か。ありがとう、キ

又タさん、教えてくれて。

タ又オ

爺様、心あたりがあるんですか。

爺様

まあ、その・・な。(ハニーを思い出し、にやける)

爺様

(すると、やはり何故か爺様は痛がり)いててて！

(再び不思議そうに辺りを見回しながら手をさする)

いやあ、危うく引っ掛かるところじゃった！キヌタさ

ん、あんたに礼をせんとな。どんな礼がいい？

お礼だなんて・・・八十両。

爺様

え？

タ又オ

八十両。

爺様

え？今八十両と言ったか。

タヌオ

そうです。お礼に八十両。

爺様

ば、ばかなこと言うんじゃない。八十文ならともかく、

八十両だ？何を考えているんじゃないやお前は。

婆様たち

（二人で顔を見合わせ、「ほう、ほう」と納得し、ニヤツとする。）

タヌオ

爺様。僕は、騙すってこと大嫌いなんです。だから、正

直に八十両くださいと言いました。

爺様

それがどうした。八十両の大金を何でお前に渡さなくち

やならない？

八十両あると、多くの者たちを救えるんです。

タヌオ

爺様

救う？何でわしが八十両を出すんじゃない。

タヌオ

爺様は、八十両あったら何をしますか？

爺様

そりや、骨とう品を買って、自慢する。

タヌオ

骨とう品と命とどちらが大切ですか？

爺様

それは・・・命に決まってる。でも、わしの金は、わし
が考えて使う。わしの金じゃ。

タヌオ

爺様は、いま八十両ありますか。

爺様

ある。ここにに入れてある。(と言って金入れを叩く)

タヌオ

それは、何のお金ですか？米のお金ですか。それとも、

魚のお金ですか。

爺様

これは・・・、これは婆様の・・・大事な金じゃ。

タヌオ

では、婆様が八十両で命を救いなさいと言ったら？

爺様

そんなはずはないじゃろう。婆様は、婆様はな、死んだ
んじゃ。タヌキに殺されたんじゃ。

婆様

見舞いの金の残りが・・・まだ八十両ある。

トメ

爺様、八十両なんて金もういらないうらなう。

婆様

死んだらね、金はいらないのさ。

タヌオ

では、僕にください。婆様たちは命を救えと、言っています。(婆様たちを見ながら)

爺様

何をいつてるんじゃ。お前は語りじゃな。お前こそ詐欺

師じゃないか！

婆様・トメ

(姿を見せる合図をタヌオに送る)

タヌオ

爺様、聞いてください！爺様！

爺様

うるさい！！

タヌオ

爺様！婆様たちが・・・婆様が・・・。

爺様

まだ言うか！

タヌオ

爺様に姿を見せるそうです。(後ろ！後ろと指を差す)

(ゆっくり振り向く爺様。婆様たちに気づく)

うわあ！！(と尻もちをつく)

爺様

爺様！！

婆様

ば、婆様——と……誰だ、あんたは。(トメを指さし

爺様

ながら)

トメです。

トメ

——ショート転換時の鳴り物——

12 (舟—Bort)

(タヌオは、爺様たちのやりとりを聞いている。)

爺様。八十両はいらんじやろ。

婆様

爺様

いや、あれが無いと……。

婆様

好きなものが買えんか？

トメ

安物の壺か？

爺様

しかし、暮らしに……。

婆様

大金はいらん。

爺様

それに……。

トメ

それに？

婆様

爺様、爺様はもうすぐこっちに来る。

爺様

どういふことじゃ？……ひよつとして。(啞然として)

トメ

そういうことじゃ。

爺様

わかった。金はいらん。

(爺様は自らタヌオに歩み寄り、そして、タヌオに八十

両の入った金入れを手渡す。タヌオは爺様、そして婆様
たちに一札をし、外に出る)

婆様

これでタヌキたちの命は救われる。

爺様

タヌキ？あの憎つくきタヌキか？

婆様

タヌキはな…ま、いい。こっちに来ればわかる。爺様、

もうちよい先じゃが、タヌキ汁も、ウサギ汁も作っちゃ

いかん。

(爺様の家の照明が暗くなり中央明転)

(夕暮れ・元締め、タヌミとポン子、バニーとパニーが

いる。)

猪之助

どうだ、金は取れたか。

タヌオ

はい。このとおり。(と、懐を触る。猪之助が取ろうとす

るが、取られないようにしながら）では、約束どおり舟を見せます。

猪之助
おお、黒光りする舟だな。

タヌオ
先に行つて、藁を取っています。…一緒に乗ってみませんか？

猪之助
一緒にか？……いいぞ、乗つてやる。

タヌミ
何を・・・何をするの？

タヌオ
（タヌミを無視して）僕が、舟を・・・僕が舟を漕ぎます…。

タヌミ
お兄ちゃん。お兄ちゃんだめ。

タヌオ
タヌミ・・・大丈夫だ。大丈夫なんだ・・・舟は漕げる。

猪之助

何をしている。早く行け！

タヌオ

二つ！妹には……き。（タヌミに対し笑顔で。爺様の家の裏手へとまわる）

猪之助

よし、お前たちはここで待ってろ。この、二人（タヌオを追いかけようとするタヌミとタヌミに付き添うポン子をつかまえ）をお前たちが見張ってろ。金を受け取ったら……爺様の家に連れて行け。

パニー

爺様に殺されてしまう。

猪之助

そんなことは知らん。爺様はタヌキをたつぷり憎んでいるからな。そうそう……タヌオは……俺が食う。

パニー

ふふふ……ははははは。（猪之助もタヌキの後を追う）あんたたち、今度こそ逃げなさい。

タヌミ

いえ、逃げない。

ポン子

どうしてなのタヌミ。

タヌミ

お兄ちゃんは・・・きつと・・・命をかけるんだわ。

ポン子

命をかける？

パニー

どういうこと？

タヌミ

あの舟は・・・。

パニー

黒い舟ね。

タヌミ

あの舟・・・は。泥の舟…。沈むの…必ず沈むの…。

パニー

あの「カチカチ山」の…。

タヌミ

違う。あの舟は父ちゃんを乗せて沈んだ。お父ちゃん

は、あの舟と一緒に今でも池の底に沈んでいるわ。

黒い舟は、お父ちゃんのお墓なの。お兄ちゃんが、泣き

ながら涙で固めた泥の舟。

バニー
じゃあ、元締めをあの舟に誘い込んで・・・・・・・・。

タヌミ
一緒に沈むつもりだわ。

ポン子
あんたのお兄ちゃんって。

バニー
なぜ、なぜ・・・そんなことするの・・・。

(皆で、丘に登った様子)

(次第に夕暮れが迫っている。紗幕越しに、元締め、夕

又オのシルエツト)

あ、舟が・・・。

お兄さんだわ

元締めと乗ってる。

あ、漕ぎ出すわ・・・。(舟を漕ぐ効果音3回)いいの？

タヌミ…いいの？！

タヌオ

(タヌオの声がタヌミに響く) 二つ！妹には…妹には…
…幸せに、なって欲しい…。

タヌミ

だめ、お兄ちゃん。お兄ちゃん死んじゃだめー！

お兄ちゃん…なんで…お兄ちゃん。だめー！

(全員、固まる)

歌手

(ほぼ重なるように、哀愁のこもった曲イントロ。上手

より歌手登場。前舞台上手所定位置にて歌い始める)

(二番の歌詞を歌い終えた所で緞帳を一端ダウンさせる。

歌手はそのままの位置で「蒼氓」二番の歌詞を続けて歌

う)

歌手

(二番の歌詞を歌い終えたところで、曲は流したままに

全員

歌うのをやめてもらう。そして緞帳を再びアップさせる
と、舞台上には出演者全員が並んでいる。その列に歌手
の方も加わって頂いたところで中央の役者がお客様に向
かって挨拶を行う)

本日はご来場頂き、そしてまた、最後までご観劇頂き、

有難うございました！

有難うございました！！

幕